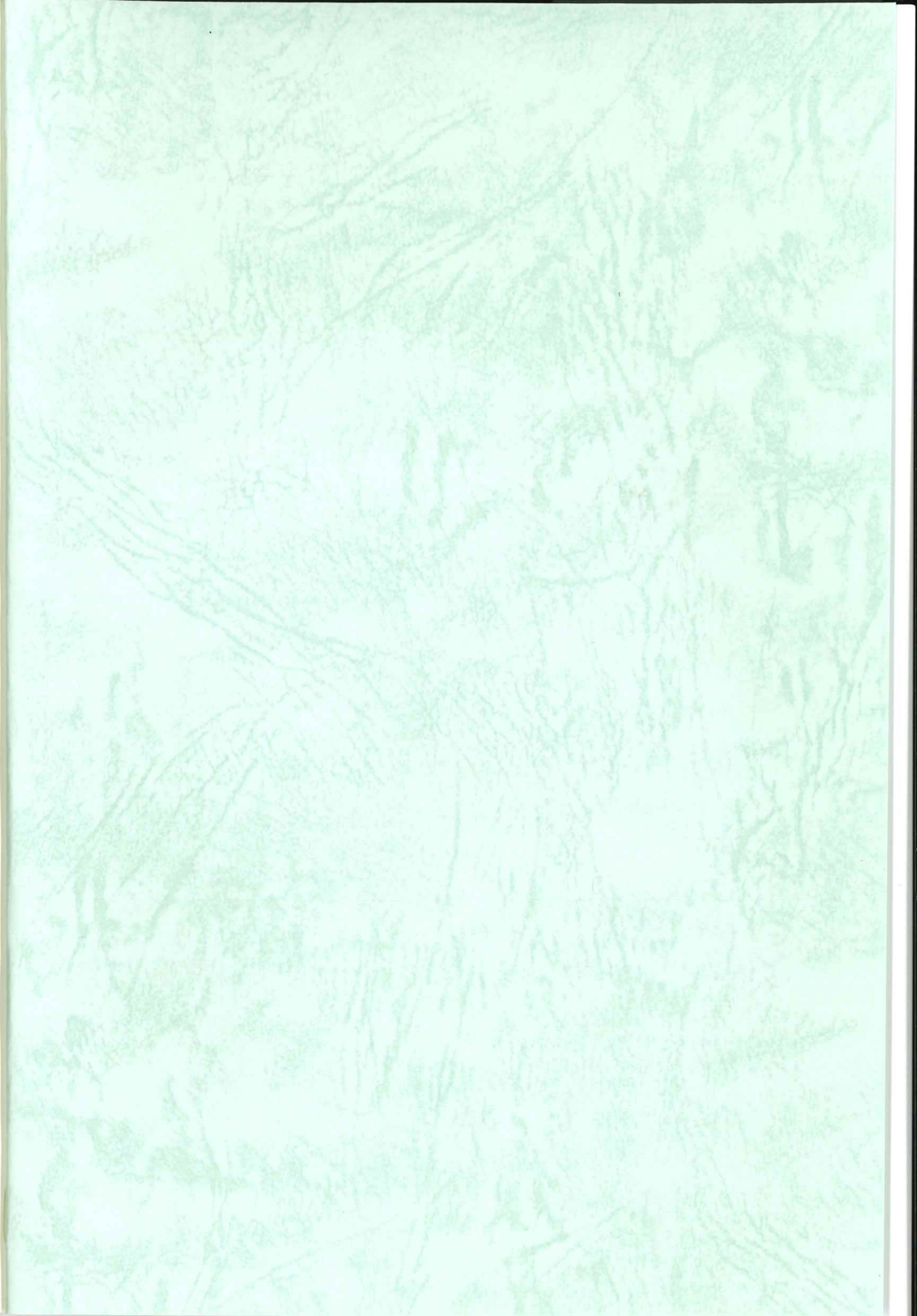
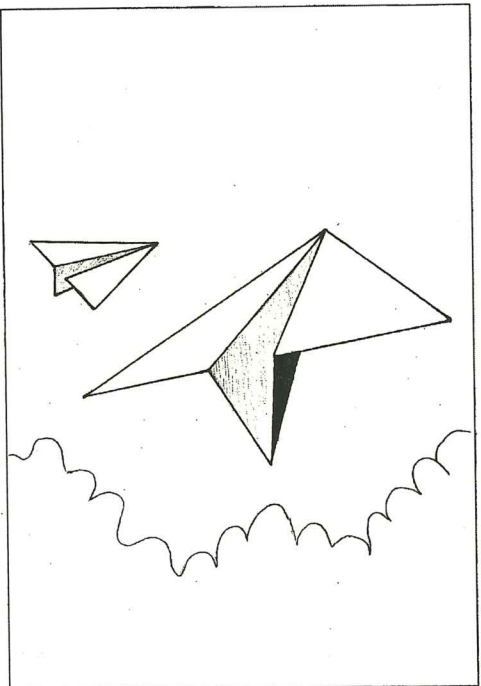


幸せの虹を架ける
差別のない世界へ



二〇二一 西尾市立東部中学校 二年生

幸せの虹を架ける
差別のない世界へ



みなさんは、ハンセン病を知っていますか。私がハンセン病について知ったのは、つい最近のことです。総合的な学習の時間で取り組んでいる、SDGsの学習の中で初めて知りました。

ハンセン病とは、らい菌が皮膚や神経を侵す感染症です。しかし、完治する病気であり、回復者や治療中の患者から感染することはまずありません。ところが、患者の方々は病気の苦痛だけでなく、多くの精神的苦痛を受けてきました。隔離され、名前を奪われ、子を産むことも許されなかったのです。

このようなことが起きてしまうのは、すべて差別と偏見からだと思います。一度起こってしまったものを変えることは容易ではなく、今でもハンセン病患者の方々の中には、大きな壁が立ちはだかっています。この状況をつくってしまったのは、ハンセン病について知らずに生活している私たちです。だからこそ、変えていくのも私たちだと思えます。このことを多くの人に知ってもらい、一緒に考えてもらいたいのです。

そして、ハンセン病に限らず、二度とこのような偏見、差別が起きないように、起こさないようにしなければなりません。

すべての人が幸せに暮らせる世界にするために、私たちにできることから始めようと思います。

もくじ

思いを言葉にのせて

短歌

二年A組	1
二年B組	7
二年C組	13

一つの輪を

人権作文

差別のない世の中へ	19
ハンセン病と人権	21
みんなが救われる世界	23
ハンセン病を知って	26

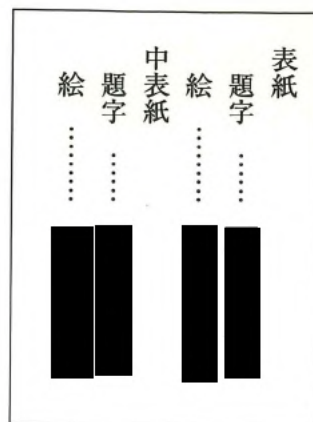
思いを言葉にのせて



輝く瞳で

学びのふり返り・交流の様子

.....



2年A組

夏と秋 どこにも行かず すぎる冬 自由に外へ 出かけられたらな

ハンセン病 あの時のことは 知らないが 苦しかったことは みんな知っている

心の傷 一生背負えど これからは あなたは自由 人生楽しもう

「ハンセン病」 その言葉だけで 差別され 私の人生 希望なし

届けよう 未来へ向かう 紙飛行機 自由を求めて 飛び続ける

よみがえる 幼い頃の 思い出の 笑顔の絶えない 夢の毎日

いじめられ 差別され命 けずられて 時はもどらず その一生

偏見と 差別を受けた あの日も今も ずっと変わらず にんげんだよと

大丈夫 容姿や暮らしが 違っても みんな同じ 人間だから

許されぬ 人の権利を 持つことも 皆が聞くべき この声を

残る差別 思いを伝え 平等に 笑顔あふれる 世界のために

本当の 優しさって 何だろう 探してみよう 自分の目で

患者らは 自由奪われ 荷物のごとし 悲しみ憎しみ わきでてくる

ハンセン病 化け物のように 扱われ 遠い家族に 思いをはせる

いやしめて 呼ぶその声が 大切な 優しい言葉に なってほしい

「ごめんね。」と 悔やむな私 未来への 扉を開くことで償え

隣人も 友人でさえ 差別した あの日のように 僕たちはほしくない

ヒーローは みんなのために 怪我をする そんな自分に なりたいな

モノクロの あの時の日本 変えてやる 瞳に色を 灯すために

人として 見られぬことの 悲しさは なくしてゆこう 自由のために

「苦しいよ」 国が奪った 命と自由 無駄にせず 今私たちが繋ぐ

ハンセン病 かつただけで 奪ってく 自分の未来と 家族の未来

待っている 未来の夢が いつまでも いつか必ず 美しい空

患者さんも 一人の人間 つらくても 一度きりの人生 歩み続けている

人々が 必死で生きてる つらい日々 いつか必ず しあわせの日に

罪のない 人を差別する その行為 いつかはなくす 私達の手で

癩病^{らいびょう}と 後ろ指さされ 差別され それでもみんな 同じ人間

手に入れた 自由よ続け いつまでも あの日忘れず 歩み続ける

真つ黒な トンネル抜けければ 青い空 友と一緒に 見に行こう

もう一度 優しい家族 未来の幸せ いつか必ず もどってくるから

考えて 差別をされる側のこと 心の傷は ずっと消えない

ハンセン病 差別や偏見 苦しい心 自由な日々は 当然ではない

負けないで 病気だろうと いつだって 貴方は充分 輝いている

癩差別 患者の未来 奪われた 必ずみんな 権利はあるのに

囚われて 自由と未来 見えずとも 翼たたまず 生きぬく強さ

空白き 僕の人生 つくろうよ 権利を示す 虹を求めて

思うように できない体 それだって 生き甲斐見つけて 生きる喜び

2年B組

患者たち 悲惨な差別に 耐えきれず 心が死んでいくのを 見るも悲しい

考える 世の普通のまま 生きることが 自分が望む 幸せなのか

発病し 自由奪われし 大人になりて 初めての自由 続くように願う

この胸の 苦しさの原因は 病気じゃなく 差別でついた ところの傷

中絶で 命そこには ない子ども 親の思いは 子に聞こえぬ

人間は 上も下もなく 皆同じ 命の価値も また同じ

流す人 流される人 どれも 似ているようで 全然ちがう

患者らに むけられた目は 差別の目 消えることなく ただ傷つける

モノクロの 心に残りし 思い出に かじかむ手先で 色づける記憶

光なく 泣きじゃくつても 戻らない 家族と仲間 幸せな日々

黒髪を なびかせ登校するはずが 差別の音が それを許さぬ

誰であれ 共に歩もう 未来へと 過去を忘れず 伝えるために

当事者に 自分があった その時に 正しい道を 歩けるのか

家族にも会えず学校にも 行けない辛さ 味わったこと ありますか

つらすぎる ハンセン病 越えた先には 自由という うれしさがある

家族さえ 打ちあけられない ハンセン病 支えた友は 今でも親友

寂しさから 解放するため 描いた絵に 見つけたのは 生きている証

産声を 上げることすら 許されない ハンセン病の 差別悲しき

我が胸に　ぎゅつと抱いた　少しずつ　冷たくなつてく　生まれし子

大変な　思いのあとに　いいことが　いつかきつと　ここにやってくる

平等に　偏見なくし　差別なく　平和な世界　みんな幸せ

病気でも　待ってくれる　人がいた　この友情が　続きますように

牢獄のごとくに闇　包まれし　空の青さも　見られぬがまま

子の命　人の手により　命減る　中絶手術　悲しくて

癩^{らい}予防とて　命絶たれし　我が子抱き　身勝手な国民の　愚かさを知る

親友と　自由と人権　宝物　泣いて笑つて　色づく世界

らい病を　隠して生きる　患者らの　悲しい思い　忘れてならず

療養所　苦しい労働　こなす日々　働く患者の　動かぬ手足

生きる意味　作り出すため　絵画描く　心の風景　表したくて

人として　持つてる権利　奪われて　息途絶えても　家族にあえぬ

伝えよう 悲劇の歴史 受けついで あの過ちを 起こさぬように

人なのに 犠牲になった 子のいのち 世間のむごさ 涙がにじむ

病とて なぜ通えない 学校に 勉強したい 同じ人として

ハンセン病 金で解決 できないよ 支えてくれるのは 永遠の友

大声で はしゃいで外へ 遊びに出る なけなしの希望 明日へ続け

どんな時も 負けない心 持ちつづけ 自由を手につかむ その時まで

2年C組

ゴールへと 続く道は 暗闇で いばらだらけの 逆境の中

暗闇に 差しこむ光は あたたかく 泣いてもいいよと 教えてくれた

柔らかに 心なぞる 友の声 自由を求む 灯火となり

ハンセン病 苦しい日々でも 共に生き 越えた先には 光輝ひかり広がる

逃げていく みんなの背中を ただ見つめ 溢あふれる涙 左目より

自由がない ハンセン病の 患者らは 病で苦しみ 外に出られぬ

あの時の 見舞いに来た 一人の子 優しい瞳の やわらかな光

永遠の 絆でできた 友達と 共にかえよう この世の中を

「大丈夫だよ」 病気の苦しみ 悲しみから 患者等救う 魔法の五文字

毎日 とてもつらいが きつとかならず 明るい未来 まっているはず

悲しさと 夜より暗い あの日々に 光差し込む 永遠の友

自由なし 真っ黒の世界 ただひたすら カラフルに染まれ 遠くない未来

夢を見た 差別が起きない 世界を見た 誰もが同じ 人間なんだ

瞳から 零れ落ちる ^{こぼ} そのなみだ そこに映るは 数多の想い ^{あまた}

傷癒えど 籠から飛ばぬ その鳥を 縛る鎖は 他人の無知なり ^{ひと}

苦難の道に 散りばめられた 幸せの種 数こそ違えど いつかきつと花開く

助けたい 心の傷を なくすために 新しい扉を 開けていこう

誰よりも 寄り添ってくれる その友は きつといつしよに 歩んでくれる

声聞いて 不安と怖さに 震えてた あなたに私の 思いよ届け

希望さえ もてない世の中を 変えると告げる 新しく生まれる 命のために

辛い過去 振り返らずに 生きていく 未来は希望 今黎明れいめいの光

周りの人は 訳もわからず 冷たくなった 私は今から どうすればいいのか

不幸でも 「幸」という字は やってくる 支え合いこそ 本当の愛

ハンセン病 黒くかかる霧 広がっている しかしその中にも 一線の光

患者らは 人権なしと 差別され 必死の叫びも 聞く耳持たれず

やるせない 想い伝わり 今誓う 優しさあふれる 明るい未来を

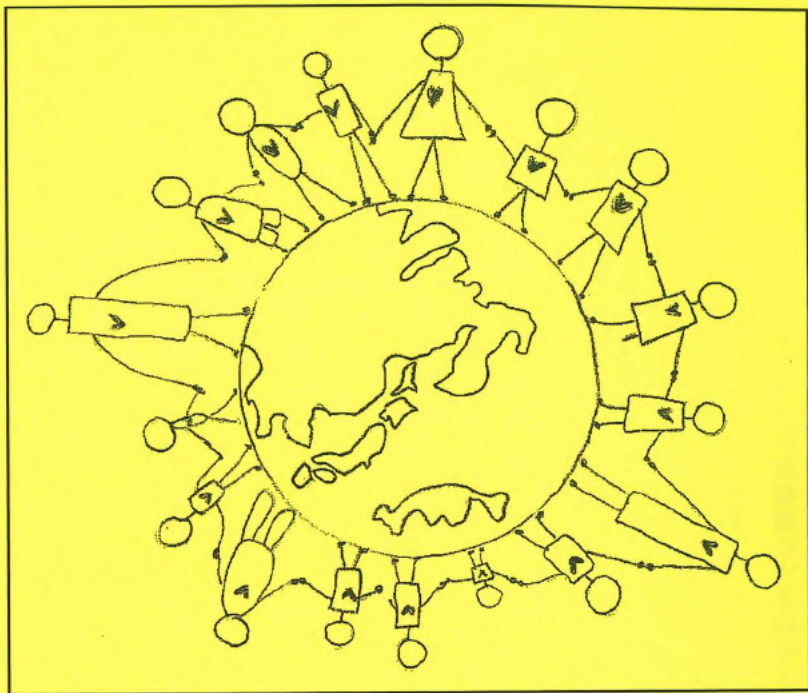
平等に いのちの重さ 違わない 自由の空は うつくしきかな

即隔離 本当にそれで あってるの 私はいつも あなたに語る

過ちは 語り継いでいこう 一億年 次の語り手は 未来の俺たち

手と足が 使えなくても 喜びを 貴方はつかむことができます

ひとつの輪を



苦しみも ともに歩んだ 友達と 伝えてゆこう 未来は明るい

ハンセン病 正しく知れば 患者の ころの扉 開かれるかな

笑顔の日 それがあから 生きられる その日が続く 世界目指して

患者らは 瞳揺らぐ 現実で 自由を夢見て つき進まん

人により 傷付き壊れて いた心 優しく包むも 人の心



差別のない世の中へ

「皆さんは、ハンセン病を知っていますか。」

総合的な学習の時間のはじめに、担任の先生がおっしゃいました。

「ハンセン病、何それ。」

私の頭の上に、はてなマークが浮かんでいました。ハンセン病がどんな病気かなんて知らなかったし、そもそもハンセン病という言葉自体になじみがなく、日常生活で聞いたこともありませんでした。

先生が、一本の動画を見せてくださいました。それは、ハンセン病の説明や、実際にハンセン病になっ

た人の体験談などを紹介した動画でした。その動画はとても衝撃的で、目を背けたくなるような内容でした。日本では、ハンセン病によって差別をされた人がたくさんいたということを、そのとき初めて知りました。

その次の総合的な学習の時間から、ハンセン病について調べていきました。まず、ハンセン病は末端の感覚が鈍くなったり、皮ふがただれてしまったりする症状があることがわかりました。しかし、これは長い間治療されず、放置された場合にのみ起きる症状であり、現代では特效薬が開発されているということもわかりました。

調べた中で一番衝撃的だったのは、ハンセン病患者への偏見や差別の内容です。ハンセン病に感染したとわかったら、保健所の人や感染者の家を真っ白になるまで消毒したそうです。そして、感染者は問答無用でハンセン病療養所に連れていかれ、隔離さ

れたというのです。施設に入ると親や兄弟姉妹とともに暮らすことができなかつたり、結婚しても子どもを産むことが許されなかつたりしました。そのうえ、一生療養所から出ることを許されずに、亡くなつても故郷のお墓に入れてもらえないという、精神的な苦痛もありました。さらには、土木作業や炊事洗濯、重症患者の世話など、あらゆる強制労働を強いられたそうです。

また、無らい県運動と呼ばれる、すべてのハンセン病患者を県内から一掃しようという目的の社会運動が開始されたことによつて、国中の人々のハンセン病患者に対する差別がますます広がっていきました。そんな世の中で、偏見や差別を恐れて本名をふせて生活する人も少なくなつたそうです。

ハンセン病患者は何も悪いことをしていないのに、当時の政府が間違つた対策をした事実を恐ろしいことだと、私は思いました。当時は人権というものの背景となつたようです。

新型コロナウイルス感染症もまた、まだ治療法が確立されていないため、ハンセン病のように間違つた知識が広まる可能性もあると思ひました。私自身も感染したら、周りの人たちから今まで通り接してもらえないのではないか、後遺症が残るのではないかという不安な気持ちがないわけではありません。このように、新型コロナウイルス感染症も正しい情報、知識がなければ、偏見や差別の対象になる可能性があるので、それに加えて、現代はインターネットで、指先一本で誹謗中傷が起こり、簡単に偏見、差別が広がってしまうかもしれません。そう考えると恐ろしいです。

私は今まで、ハンセン病のことを知る機会もなかったし、自分には関係のない出来事でした。しかし、ハンセン病について調べてから、以前の私のように無知や誤つた知識のせいで差別が起きてしまう

のも全く考えられていなかったと、改めて感じました。

調べていく中で、ハンセン病に関わる問題は私たちにとつてあまり身近ではなかつたけれど、ハンセン病以外でも同じように周囲から偏見や差別を受ける可能性のある病気もあるのではないかと思ひました。例えば、新型コロナウイルス感染症です。なぜなら、新型コロナウイルス感染症は、ハンセン病に似ている点がいくつかあると思つたからです。似ている点の一つとして、ハンセン病も新型コロナウイルス感染症も、人々の知識不足による不安や、感染したくないという思いがあるところだと思ひます。

ハンセン病の場合は、治療法が確立していなかったときに、近くに行くだけで病気がうつるから、病気になるたら終身隔離をしなければならぬという、誤つた知識がまん延し、偏見や、それにより絶対に感染できないという恐怖が広まり、それが差別

ことがわかりました。知識不足が偏見、差別の原因ならば、こうして私が知つたことを人々に伝え、訴えていくことも、偏見、差別をなくす第一歩になると思ひます。偏見、差別のない、みんなが笑顔で幸せに暮らせる世の中を創りたいです。

ハンセン病と人権

みなさんは、「ハンセン病」を知っていますか。知らない人も多いかと思ひます。僕も授業で勉強するまでは知りませんでした。しかし、勉強していけばいくほど、ハンセン病について、もつと多くの人が正しい知識をもつて理解することが大切だと考えるようになりました。

まず、ハンセン病とは、皮ふと末梢神経をおもな

病変とする抗酸菌感染症です。今は治療法が確立している病気です。他の病気といちばん違うところは、見た目が変わってしまふところ。神経がまひし、指がなくなってしまうたり、目まで皮ふが垂れてきて目が見えなくなったりしてしまいます。昔は間違った知識から、ハンセン病にかかった人は強制的に療養所に隔離されていました。そして、ハンセン病にかかった人、またその家族はひどい差別をされてしまふハンセン病を国の恥だと考えた国が、海外の目から隠そうとしたために行われたのです。ハンセン病は当初、感染力の強い感染症と考えられていました。家族にハンセン病患者が出てしまふと、その家には消毒する人が派遣され、家が真っ白になるくらい、くまなく消毒されました。その消毒する人たちが来ることで、

「あの家からハンセン病患者が出たね。感染するか

強い病気ではないことがわかった後も、日本はそれを無視して、「国の恥」として強制隔離をし続けました。

のちに、この政策に反対した元ハンセン病患者とその家族が声を上げ、国を相手に裁判を起こしました。長く続いた裁判ですが、ついに勝訴しました。国が政策の過ちを認め、ハンセン病患者とその家族に深く謝罪し、賠償金を払うことを約束しました。

これで、ハンセン病患者とその家族の長い苦しみは終わったかと思いましたが、現実はその間に甘くありませんでした。ハンセン病元患者の中には社会復帰できた人もいましたが、その見た目から社会復帰を諦めてしまふ人もいました。家族が差別を受けないように、未だに自分の本名を名乗ることすらできていない人もいます。

このような日本のままでよいのでしょうか。すべての人が幸せに暮らせることが、いちばん望ましい

ら距離をおこう。」
といううわさが近所に広まり、差別されることになったのです。

もし、僕がハンセン病にかかって、急に知り合いがまったくいない療養所に連れていかれたら、怖くて不安だと思います。家にどうしても帰りたいと思うでしょう。けれども、家族が差別されることを知ったとしたら、もしも病気が治って社会復帰できるようになったとしても、差別を恐れて帰れないと思います。

では、友達がハンセン病にかかってしまったとしたら、どうでしょう。差別をしてはいけないものを知っているながらも、自分はハンセン病にかかりたくない、かかってしまふと僕まで隔離、差別されてしまふと思うと、それまで通りに接することが果たしてできるでしょうか。

その後、医療が発達して、ハンセン病は感染力の弱さ、そんなに簡単に変えることはできません。しかし、僕たちが正しい知識をもつことで、少しずつ変えていけるかもしれません。正しい知識をもち、伝えていくことが、ハンセン病患者の人権を守ることにつながっていきます。まずは、ハンセン病患者の方の苦勞を知り、どんなことが差別につながってしまうのかを考えることが、すべての人が幸せに暮らせる世の中にするために大切な一歩だと思えます。

みんなが救われる世界

最近、私はあるCMを見ました。そのCMには、適切な治療を受けられず、がりがりにやせ細って苦しんでいる小さい子どもと、その子を不安そ

うに見つめるお母さんが映っていました。私は初めてこのCMを見た時とても衝撃的で、すごく悲しくなって、思わず涙が出てきてしまいました。

私たちは病気になったら、病院で検査をしたり、治療や入院をしたりします。私はこれが当たり前だと思っていました。でも、このCMで紹介されていた地域は、私の想像する治療や病院とは大きくかけ離れていました。治療を受けようとしてもまず治療に使う施設や設備が整っていないし、人手も足りない。そのため、しっかりと環境が整っていれば救える命も落としてしまうのだそうです。私はそのことが信じられませんでした。最近では国際的に医療の面は発展してきたから、もう国や地域によって医療の差はあまりないんだと思っていました。でも、実際はそうではなく、日本などの先進国は私が思っていた通り、医療が発展してきたけれど、一部の地域ではあまり発展しておらず、苦しい状況が続いているの

命が救えず、次々と死んでいく子どもたちがたくさんいると考えると、自分の無力さが本当に憎らしく感じましたし、自分は今、毎日おいしいものを食べることでできて、学校でいろいろなことを学ぶことができ、好きなことが思う存分できているのに、なぜ苦しんでいる人たちに対しては何もできないんだろうと思うと、とても悔しく、もどかしい気持ちになりました。

でも、さすがに彼らのために何もできないままなのは嫌だと思い、もう一度自分にできることを考えてみると、あることが思い浮かびました。それは、「直接彼らの助けになっていなくても、自分ができることを一生懸命やる」ということです。自分にはお金も人を動かす力もないけれど、普段の生活でできることを一生懸命やれば、少しでも彼らに何かができるのではないかと思っただけです。

私にできること、それは、人のもっている権利を

です。私はなぜ、みんな同じ地球人なのにこんなにも差ができるのだろうか、生きる権利は世界中の誰にもあるはずなのに、国や地域によってこんなにも違いがあるなんておかしいと思いました。そして、自分にも何か少しでもできることがあるのだとすれば、私はそれをやらなければならぬし、それで救える命を増やしていきたいと強く思いました。

そこで、実際に自分がこういう人たちのために何ができるのだろうかと考えたとき、ふとCMのことを思い出しました。CMでは「一日〇円、一カ月〇円」というかたちでお金を寄付することで助けようと宣伝していました。けれど、自分のような中学生は寄付するほどのお金を持っていないので、この方法は諦めました。医療機器を増やそうと思ってもたくさんのお金がかかってしまうし、人手を増やそうと思っても自分にはそんなことをできる力はないので、それもできません。今この瞬間も救えるはずの

大切にすることです。例えば、自分のまわりでいじめられている子がいたら助けてあげることです。誰かがいじめられて、その子だけが苦しむのはおかしいと思います。誰にでも楽しく過ごす権利はあります。自分の周りで苦しんでいる子がいたら積極的に助けて、楽しく過ごせる子が増えるようにしていきたいです。

楽しく過ごす権利の他にも、個人として考えをもつ権利もあると思います。例えば、学級や学年などで何かを決めるとき、多数決で決めてしまうと多数の人は納得のいく結果だったとしても、一部の人は納得のいく結果ではないはずで、そうすると、不平等な決め方だということになります。誰にでも個人として考えをもつ権利はあるはずですから、みんなで何かを決めるときは、多数決で安易に決めてしまうのではなく、話し合いなどでみんなが納得のいく結果になるようにすることも大事だと思いま

す。

このように、直接CMで見た子どもたちの助けになっただけではなく、普段から人権意識をもつことを心がけていくことで、自分の周りの人が人権や平等な世界に関心をもってくれるかもしれせん。私は将来、医療関係の仕事に就きたいという夢があります。大人になってもこの心がけを忘れずに、国や地域に関係なく、たくさんの人を救うことができるような人になりたいです。

ハンセン病を知って

「恐ろしい病」「国民の恥」

私はインターネット上のこの言葉に絶句した。昔の日本ではそのような言葉を言われ、苦しんだ人が

どれだけいるのか。改めて偏見・差別がどれほど怖いものか、私はそのとき初めて知った。

総合的な学習の時間。私たち二年生はハンセン病について学習することになった。病気の名前は聞いたことはあったものの、どのような病気か詳しいことは全くわからなかったので、調べ学習から始まった。

調べていくうちに、ハンセン病というものがどのような病気なのかわかってきた。ハンセン病というのは、病気の症状ももちろん患者を苦しめたが、それ以上に患者に対する国の政策、その政策を受けた国民の偏見や差別が、患者を苦しめていることがわかった。インターネットの情報には、「政府がハンセン病に感染した患者の家を非常に大掛かりに消毒し、そのことが『感染力の強い病気』だという国民の誤解を生むことになった。」と書かれていた。この政策から、ハンセン病患者への長年に渡る偏見・

思った。

差別が始まった。ハンセン病に感染したことが周囲に知れ渡ったとたん、患者は近所付き合いから疎外されたり、罵声を浴びせられたりして、とても辛い日々を送ることになった。そして、ハンセン病が回復しても自分の実名を名乗れない、故郷の墓に埋葬してもらえないといったひどい扱いをうけた。ただ病気になるってしまっただけに、こんなにも患者を苦しめ、自由を奪ってしまうことは絶対におかしいと、私は思う。誰もその人たちを助けることはできなかつたのだろうか。あらためて偏見・差別の怖さ、辛さがわかってきた。

苦しんだのは、患者本人だけではない。調べていくうちに、患者の家族も同様に、偏見・差別を受けて苦しんだこともわかった。親がハンセン病になってしまった子は、「病気の子」と言われ、みんなから避けられていたそうだ。感染してない家族まで差別されてしまうなんて、なんと理不尽なことだと

「自分のせいで……。」

と何度も自分を責めてしまっただろう。ただ、ハンセン病という一つの病気に感染してしまっただけで、罪を犯したのでも、暴力をふるったのでも、人に嫌がらせしたのでもないのに。悪いことは何ひとつ

輝く瞳で



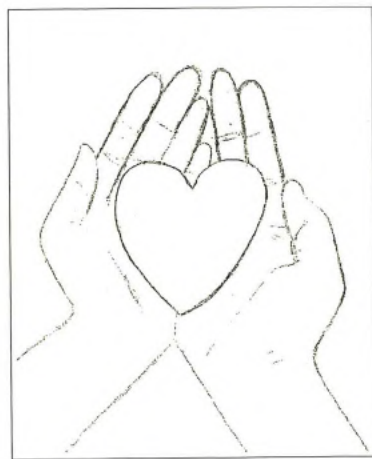
やっていないはずなのに、どうして差別を受けてこなければならなかったのか。

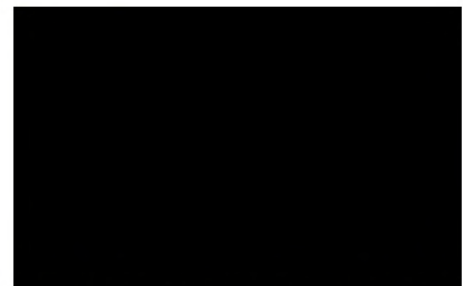
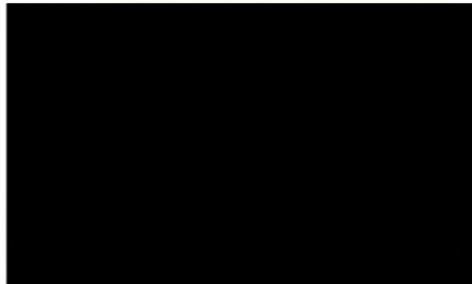
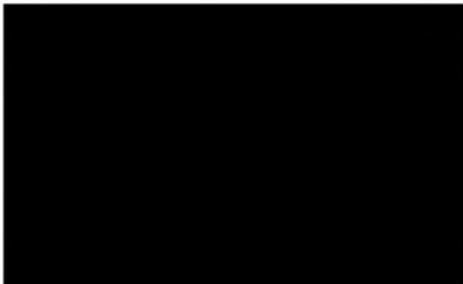
ハンセン病患者に限らず、この世界で差別は絶対にあってはならない。いくら気に入らない人がいたとしても、それは差別をしてもよいという理由にはならない。差別をしてもよいという理由など、この世には存在しない。しかし、理由がなくても差別は起こりうる。そのとき、差別をなくしていくにはどうすればよいのか。特定の人とする差別もあれば、不特定多数の人がする差別もある。差別を見ている人もいる。ただ見ているだけで差別はしてない、それでいいのだろうか。

「やめようよ。」

そのひと声で、差別の連鎖を止められるかもしれない。そのひと声で、もしかすると多くの人の心、多くの人の命を助けられるかもしれない。差別をなくす第一歩になるかもしれない。

差別をなくすことは簡単なことではないかもしれない。でも、誰もがひと声かけられる存在になれば、いつかこの世界から偏見・差別がなくなると思う。私はひと声かけて誰かを救えるような存在になりたい。





「同じ過ちをくり返さないために、どうすればいいのだろうか」をテーマに話し合い、発表する様子

話し合いを通して、間違った情報や噂に流されず、ハンセン病に対して正しい知識をもつことが大切だということがわかりました。ハンセン病患者たちがどれだけつらい思いをしてきたか、どのような生活をしてきたのかについて調べ、ハンセン病患者に対する差別についてももう一度考えたいと思いました。

ハンセン病にかかってしまった人は、何も悪いことをしていないのに、まるで犯罪者のような扱いをされ、苦しい思いをしたと思いました。私たちにできることは少ないかもしれないけれど、同じ過ちをくり返さないようにするために、病気を正しく理解して、これからの世代の人たちに伝えていけたらいいと思いました。

勝訴した時の元患者の人たちや、その家族の喜び方を見た時に、それまでの生活がどれほど辛く苦しかったのかよく伝わってきました。これから先、またこのような偏見や差別に出会っても、今日の話し合いや、他のグループの発表から学んだことを大切にしていきたいと思いました。

ハンセン病の人に対する差別は計り知れないものだと思います。僕たちはハンセン病に関する間違った知識を正し、伝えていくことが大切だと思います。現在でも新型コロナウイルスに関する正しい知識をもち、正しく理解していけば差別もなくなるのではないかと思います。



ハンセン病を知って

ハンセン病は病気が苦しいというだけでなく、治って社会に出てからもたくさんの人々から差別されて苦しんできたことや、家族もたくさんの人から差別を受けたことがわかりました。これから先、ハンセン病だけでなく、どんなことに対しても差別がなくなり、世界中の人々が平等に暮らせるようになってほしいです。自分たちにできることがあるのなら協力していきたいです。

自分の家族が心配だからと、自分の本名も自分の病名も誰にも言うことができないなんて、そんなに苦しく悲しいことはないと思います。人は、思いを伝えることができるすごい生き物のはずなのに……。もしかしたら、人間が一番怖い生き物なのかもしれないと思いました。多くの人々が口にする「普通」って何なのだろう、「誰かのために」ってどうすればいいのだろうと思いました。

ハンセン病について調べてみて

まずは知識を得ることが大切だと思います。人が差別をする理由は、大半が「怖い」から。ハンセン病のことをよく知ろうとせず、治っても差別をし続ける人は、知識がないのだと思います。今の時代は、ネット社会。情報を得るツールはみんな当たり前のように使えます。だからこそ、それらをうまく活用して、たくさんの人に「知ること」の大切さを理解してほしいです。

人々は、「国がこう決めたから」「国が先に動いたから」と国を盾にして、ハンセン病患者に対して差別を続けてきたのだと思います。差別は何も生まない、むしろ人として何かを失うのではないかと思います。

何かできないかと話し合ったときに、ハンセン病患者との交流を含むイベントを開くことを考えました。差別が減らせるのであれば、できるといいと思いました。

ハンセン病を知って

家を消毒するなど、まるで家族も病気にかかっているかのような国の対応を、ひどいと思いました。

ハンセン病患者は子どもを産めないと聞き、驚きました。治療法があり、遺伝もしないこともわかっているのに、悲しいことだと思いました。

調べ学習 ▶▶ クラスでの発表

私は、裁判について調べる前は、なんでもっと早く提訴しなかったのだらうと思っていました。けれど、調べていくうちに、原告の人数不足や年齢、療養者やその家族への差別や偏見などの問題があることがわかり、提訴したくてもできない状況だったのだと思いました。

隔離する施設があるのがおかしいし、ハンセン病にかかっても、施設でつらい作業をしないといいなかったと知り、とてもつらいと思いました。

療養所での暮らしは、家族に会えなくて、苦しい思いをたくさんしていたと思いますが、その中でも励みになったことはどんなことなのかと疑問に思いました。

それぞれ違うことについて調べていたのに、最終的に差別につながるのだと思いました。ハンセン病患者はいろいろな名前と呼ばれたり、差別されたり、本名を変えさせられたりして、人としての暮らしができなくなってしまい、自分だったら耐えられない苦しみや悲しみ、痛みだったと思いました。

大高さんのお話を聞いて

妊娠中絶の話の中に出てきた真理子さんは、今年生きていけば七十歳で、孫や子どももいたかもしれないという話が印象に残りました。ハンセン病患者の妊娠中絶は、そのおなかの子だけではなく、その何代も先にあつたかもしれない命まで奪っているのではないかと思いました。

黒髪小学校のように親がハンセン病というだけで、子どもは何も病気じゃないのに入学を拒否されるというのは、とても恐ろしいことだと思いました。しかも「他の小学校に入学させたら？」と言っているけれど、自分たちの学校には入学させないという大人たちの他人任せで、誤った政策は、二度と起こしてはいけないものなのだと思っていました。

「差別は自分のことになった時に姿を現す」という言葉を聞いて、確かにそうだと思います。実際に、その時代に僕がいて、本当に差別をしなかったとは限らないと思っただけです。

僕が一番心に残った話は、桜井さんの話です。中絶の手伝いを求められ、自分の子どもを自分の手で殺してしまうような行為をしてしまったのは、考えることのできない苦痛だったと思いました。

学んだことを伝え合い
考えを深めた学年交流会

ある班が、外国のハンセン病の歴史と日本の江戸時代のころのハンセン病患者の扱いについて調べていました。ハンセン病患者は世界中にいるけれど、今までは日本の中のことしか調べていなかったため、外国での政策についても調べてみたいと思いました。そして、江戸時代のころは隔離などもされず、自然治療をしていて、差別をするのではなく、助け合いながら暮らしていたということを知って衝撃を受けました。

僕たちの班もハンセン病の現状について調べましたが、他のクラスは僕たちの班とは違って、病気を治す薬についての発表もあり、より深くハンセン病の現状について理解することができました。しかし、僕たちの班と他の班にも共通点があり、差別に関することはどちらも同じ内容だったので、差別に対する意識は変わらないと思いました。

「裁判で勝ち、賠償金をもらったとしても、患者さんたちの辛かった日々を取り戻すことはできない。」と書いてあり、本当にその通りだと思いました。だからこそ、今私たちはハンセン病に対して正しい知識をもち、これからの人生につなげていくべきだと思いました。

元患者さんとの交流を通して

お子さんやお友達、シスターさんについてのお話を聞いて、支えがあったことは本当に心強いものだと感じました。周りに当然のように支えられている今の日常は、当たり前ではないということを強く感じる事ができました。今日のお話を聞き、もつとハンセン病に対する考えを深めたいと思いました。

今日僕が一番大切だと思ったのは、信頼できる友達をつくり、その友達がずっと大切にすることです。今日お話を聞いて、人生において友達は、一番大切な存在なのかもしれないと思いました。僕には、信頼できる友達がたくさんいます。その友達を今以上に大切にしたいと思っています。

よい友達に助けられ、支えられて生きてきたことを聞いて、人が生きるためには助け合いが大切だと思いました。もし、自分の望む自由がなくても、心の中を打ち明けられるような友達をつくり、支え合えるといいと思いました。僕も大人になったら、子どもに伝えていきたいと思っています。

参考文献

- ・ハンセン病の向こう側 厚生労働省
- ・キミは知っているかい？ハンセン病のこと。 国立ハンセン病資料館
- ・知ってほしい、ハンセン病のこと。 国立ハンセン病資料館
- ・ハンセン病を生きて 伊波敏男 著
- ・ハンセン病をどう教えるか 「ハンセン病をどう教えるか」編集委員会 編



編集後記

僕たち二年生は、「誰一人取り残さないために」国連で採択されたSDGsについて学び、知識、理解を深め、考え続けてきました。

その中で僕たちが感じたこと。それは、一人でも多くの人が思いを伝え合い、協力し、自分にできることを探し続けていくことが、未来の社会を変える力になるということです。

この冊子が、その第一歩となりますように。

短歌集

幸せの虹を架ける 差別のない世界へ

発行日 令和3年11月15日
発行者 西尾市立東部中学校
2年生
印刷所 アートワーク飯島